



No.33・34(合併号)

1992. 9. 20

# 新潟県支部報

## 特集一 巻機山・菅名岳の鳥類調査報告

### 調査の背景と経過

南魚沼にある巻機山(主峰牛ヶ岳1991.6m)は県境の三国山脈の北部に位置し、織姫の伝説もあり、頂上付近の女性的なスロープと山容の美しさで、登山者には人気のある山である。山麓もまた清水集落付近の静かなたたずまいの中に、自然を求めて訪れる人は多い。魚沼連峰県立自然公園に含まれ、中腹には二次林であるがよいブナ林もあり、他の広葉樹と共に今後豊かな自然林となることが予想される。

この巻機山が大手不動産業者によりスキー場など大型開発構想が進められた中で、1988年より県内外から巻機山の美しい自然を守ろうと、開発に反対する運動が盛り上がった。

一方菅名岳(909.2m)は五泉市の東部にあって魚沼丘陵の北端に位置し、すぐ北を流れる阿賀野川からせり上がった山陵の一つで、その南西にある大蔵岳(864.3m)とは峰続きとなっている。菅名岳も大蔵岳も山腹にはかなりよいブナ林があるほか、新江川上流の沢筋は原生林状になっていて、トチ・カツラ・ブナ・サワグルミなどの大木も生育している。特にカツラの大径木がまとまって存在す

る林は、県内ではもちろん全国でも珍しいとされている。この山は国有林であるが、県の自然環境保全地域の候補地にもなっている。

この菅名岳で1986年に所管の前橋営林局による伐採計画が明らかになると、大学の識者

・保護団体・地元自治体などから保存を訴える運動が起り、営林局に陳情などが行われた。

当支部はこれらの保護運動には直接加わらなかったが、この二つの山の鳥類については、これまで本格的な調査が行われていないか、行われていても公表されていないので、支部独自で調査して、基礎資

料にしようということになった。総会の承認を経て、数名ずつの調査チームにより、巻機山は89・90年に、菅名岳は90・91年に調査した。調査チームは実費以外はボランティア活動で行った。

なお、巻機山の開発は現在開発主体の業者の方で凍結中である。菅名岳の方は営林局でその後「施業見合せ林」とし、当面伐採計画からはずされているが、施業計画は5年後の1992年に見直されることになっている。

(保護部・山本 明)



## 巻機山の鳥類

渡辺 央\*・山本 明・柳瀬昭彦（\*執筆）

### はじめに

巻機山は県南部、群馬県との県境に位置する標高1967mの山岳である。表日本との分水嶺を成す三国山脈の北端を占め、亜高山性針葉樹林の欠如した山岳の多い新潟県において珍しくオオシラビソ林が広範囲に発達していることから、その山容のすばらしさとともに貴重な自然植生が残る山として知られている（西山，1983）。一方、巻機山の鳥類についてみると、その資料はきわめて少なく、1969年の千葉（1972）による観察報告が残されているにすぎない。

この巻機山に1980年代後半スキー場などの大型開発構想が持ち上がり、この貴重な山岳を開発から守ろうとする運動が県内外のアルピニストや自然保護団体からおこり、本山岳への関心が大いに高まった。このような状況の中で、日本野鳥の会新潟県支部では早急に本山岳の鳥類調査の必要性を認め、1989～1990年にかけて調査班を編成し、繁殖期を中心に生息鳥類の生態学的調査を行った。その結果、すでに自然林のほとんど無くなった山麓部から、多雪地の貴重な亜高山植生が見生息する鳥類の分布が明らかになった。そこで、本山岳の保護に資する意味からここに結果を報告したい。

### 調査地

調査は塩沢町清水集落から巻機山山頂までを踏査した。調査コースはいずれも集落から巻機山登山口にあたる桜坂（750 m）を経て山頂に至る井戸尾根コースが主であるが、割

引沢を経て山頂に至る沢コースでも行っている（図1）。調査コースの植生等については結果の中で述べるが、概ね集落から2合目にあたる桜沢まではクリ、マルバマンサク、リョウブなどからなる二次林で、下の方に成林したスギ林も多い。井戸尾根の、七合目付近（約1600m）までは、ブナ、ムシカリ、ウワミズザクラ、ハウチワカエデなどを主とする。亜高木の落葉樹林で（図2）、ブナ林は1200～1500mにかけて分布する。標高1600m付近から9合目の前巻機山（1861m）までは、冬の積雪と強い季節風によって、ミヤマナラ、ジャクナゲ、ダケカンバ、チシマザサなどの風衝低木群落が発達する（図3）。前巻機山から山頂（1967m）までは、ヌマガヤなどを主とする風衝草原が発達し、湿性の高山植物も生育している（図4）。その中にオオシラビソ林が疎らに出現するが、まとまった純林は山頂の南西斜面に広がるものの、多くは風衝型で、分布も断続的である（図5）。

### 調査方法

調査の年月日、調査コース、調査距離などは表1に示した。調査方法は半径50mの範囲に出現する鳥類をすべて記録するライントラセクト法によって行った。

調査結果の整理に当たっては、5～7月の調査結果を繁殖期、4月と10月の調査結果は非繁殖期とした。調査範囲以外に出現した鳥類については、出現種数としては載せたが、その個体数は密度の算出にあたっては除外した。

表1 巻機山の調査年月日・調査コース・調査者

調査年月日	調査時間	天候	距離(k)	調査コース	調査者
1989. 5. 27	16:00～16:30	晴れ	0.8	清水集落周辺	山本明・柳瀬昭彦
5. 28	4:22～7:45	曇り	4.8	集落～桜坂～井戸尾根～巻機山 7号目	山本明・柳瀬昭彦
7. 14	8:30～14:18	晴れ	4.7	桜坂～割引沢出会い～割引沢～ 割引岳	山本明・渡辺央
10. 10	7:30～12:30	晴れ	4.8	桜沢～井戸尾根～巻機山山頂	渡辺央・古川英夫
10. 28	15:38～16:10	曇り	1.0	清水集落周辺	山本明・柳瀬昭彦
10. 29	8:00～11:14	曇り	4.1	集落～桜坂～井戸尾根～巻機山 5合目	山本明・柳瀬昭彦
1990. 4. 22	7:37～13:25	晴れ	4.4	集落～桜坂～井戸尾根～巻機山 5合目	山本明・柳瀬昭彦
5. 26	5:00～10:46	晴れ	4.8	桜坂～井戸尾根～巻機山山頂	渡辺央・柳瀬昭彦・ 古川英夫
6. 16	5:30～5:50	雨	0.5	桜坂～井戸尾根～巻機山3合目	渡辺央・山本明
7. 26	4:30～8:41	曇り	4.5	桜坂～井戸尾根～巻機山山頂	山本明

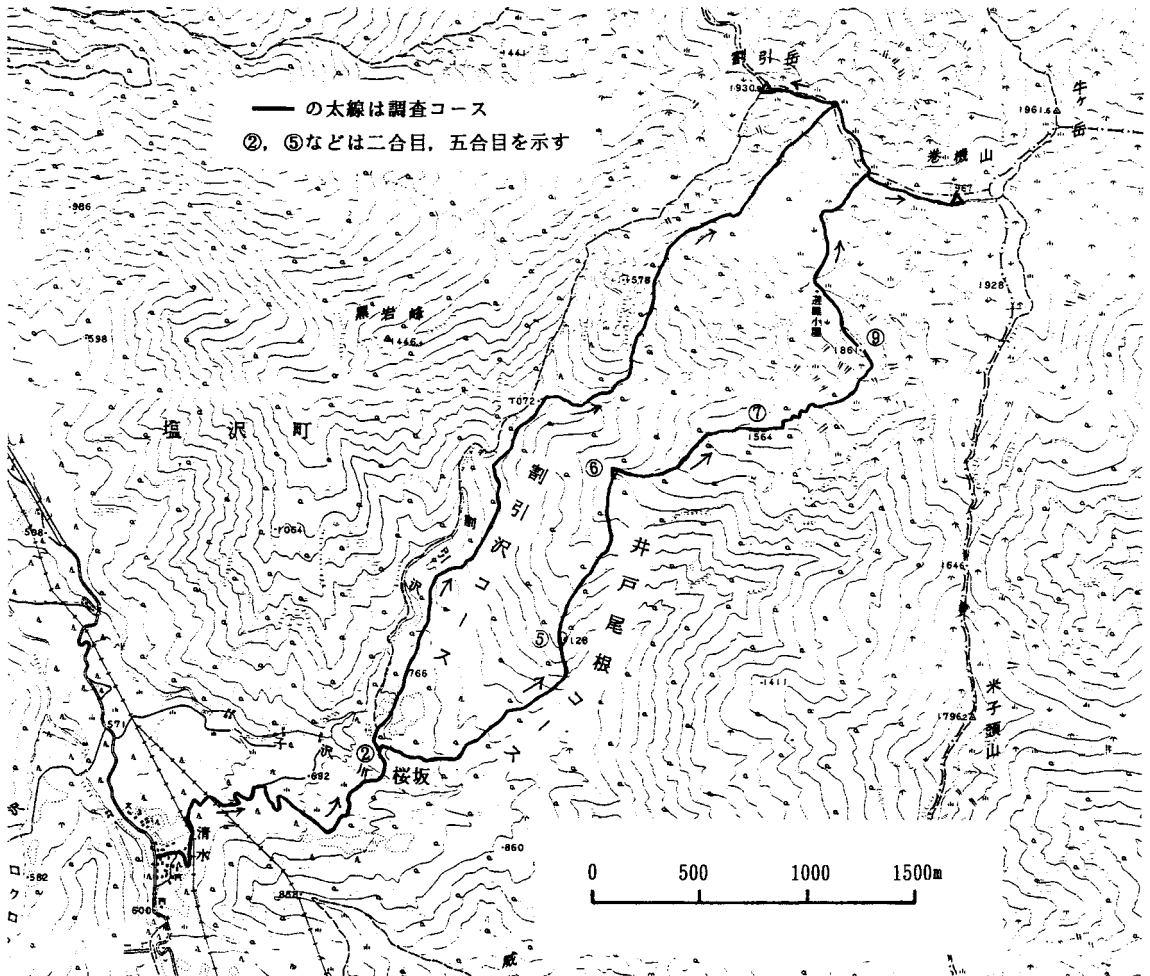


図1 調査コース（国土地理院1/25000地図より）

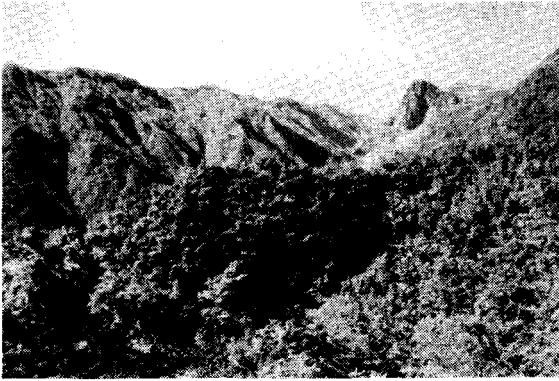


図2 5合目付近の亜高木を主とした落葉樹林

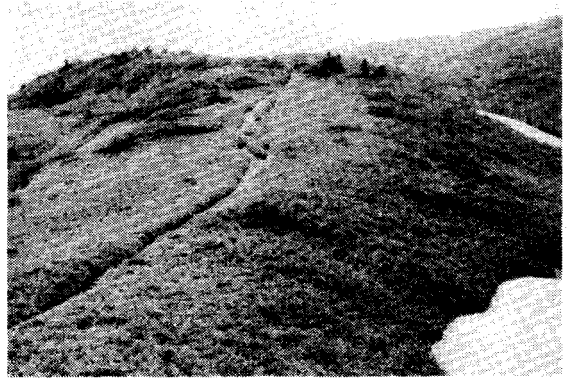


図3 7合目から上部に広がるチシマザサなどの風衝低木群落

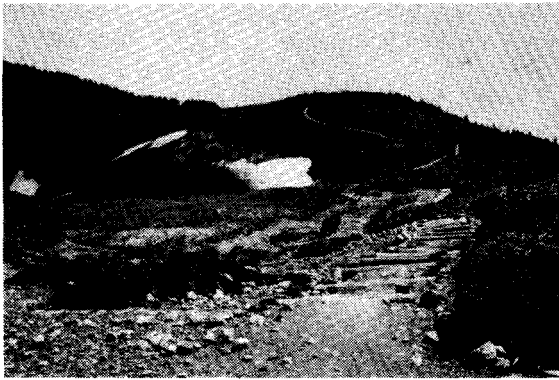


図4 前巻機山（9合目）と巻機山山頂間の風衝草原

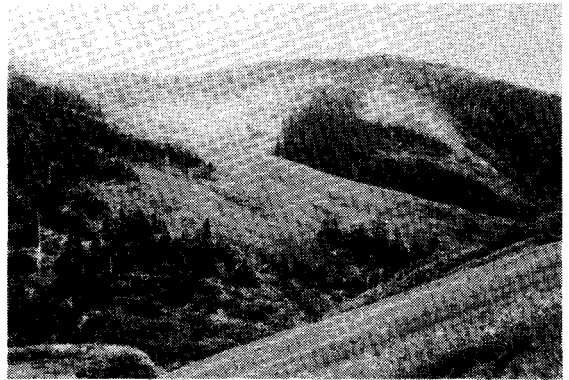


図5 山頂付近の風衝草原とオオシラビソ林

## 結果と考察

### I 鳥類相の概要

繁殖期、非繁殖期の調査合わせて確認された鳥類は8目25科69種になる（表2）。このうち非繁殖期にのみ確認された種は、カルガモ、ハイタカ、イヌワシ、ルリビタキ、ノビタキ、シロハラ；ツグミ、エナガの8種である。このうち、シロハラとツグミは冬鳥として、また、ノビタキは旅鳥としてこの時期に出現したものと判断されるが、カルガモとエナガは清水集落周辺で繁殖の可能性も高い。また、ハイタカとイヌワシについては本山塊での繁殖は否定できないが、後者についてはその行動範囲が広いことや繁殖期の観察がないことなどから考えると、他の山岳からの飛来という線が強い。ルリビタキについては10月に1200m付近で観察されているが繁殖期に

は記録がなく、本山岳の森林植生などからみて繁殖の可能性は低いかも知れない。1969年の千葉（1972）の調査でも本種は記録されていない。

繁殖期の出現鳥類は8目24科52種になる。一山岳の出現種類数としては会津駒ヶ岳の53種に匹敵する（小笠原，1967）が、守門岳（62種）や日尊倉山（59種）よりは少ない（渡辺，1992；渡部，1991）。しかし、これらの種類数の比較はそれぞれの調査条件（例えば、調査日数や調査時期）などによっても相違するため、一律にはできない。

例えば今回の出現種類数の中にはカルガモやエナガ、また、情報によると集落周辺で繁殖しているというサシバ、さらに1969年に確認されているハシボソガラスやヨタカなどについては載せていない。これらについては今後の調査によって繁殖期に記録される可能性は

表2 巻機山の出現鳥類と出現時期および出現地域

目	科	種	繁殖期（5-7月）				4月			10月						
			a	b	c	d	a	b	c	a	b	c				
ガンカモ	ガンカモ	1. オシドリ 2. カルガモ	*				*									
ワシタカ	ワシタカ	3. ハチクマ			*								*			
		4. トビ			*							*				
		5. オオタカ			*							*				
		6. ハイタカ			*				*							
		7. ノスリ				*										
		8. イヌワシ					*									
		9. タカ（sp）												*		
		カモメ	チドリ	10. イカルチドリ	*											
			シギ	11. イソシギ	*				*							
ハト	ハト	12. キジバト	*			*		*			*					
		13. アオバト			*											
ホトトギス	ホトトギス	14. ジュウイチ			*											
		15. カッコウ		*	*											
		16. ツツドリ		*	*											
		17. ホトトギス	*		*											
ブッポウソウ	ブッポウソウ	18. ブッポウソウ	*	*												
キツツキ	キツツキ	19. アオゲラ		*	*	*		*	*		*	*	*	*		
		20. アカゲラ			*				*	*		*	*	*		
		21. コゲラ	*	*	*	*		*	*		*	*	*	*		
スズメ	ツバメ	22. ツバメ	*	*	*		*	*								
		23. イワツバメ	*		*											
		24. キセキレイ	*	*	*	*	*	*			*					
	セキレイ	25. セグロセキレイ	*		*							*				
		26. ビンズイ			*											
		27. サンショウクイ	*	*	*	*										
	ヒヨドリ	28. ヒヨドリ	*	*	*	*		*	*					*		
	モズ	29. モズ				*						*				
	カワガラス	30. カワガラス	*				*					*				
	ミソサザイ	31. ミソサザイ			*	*		*	*		*	*				
	イワヒバリ	イワヒバリ	32. イワヒバリ			*	*									
			33. カヤクグリ			*	*									
			34. コマドリ			*	*									
			35. コルリ			*	*									
			36. ルリビタキ			*	*						*	*	*	
			37. ノビタキ			*	*						*	*	*	
			38. トラツグミ			*	*						*	*	*	
			39. クロツグミ		*	*	*	*	*	*			*	*	*	
			40. シロハラ			*	*						*	*	*	
			41. ツグミ			*	*						*	*	*	
	ヒタキ	ヒタキ	42. ヤブサメ	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	
			43. ウグイス	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	
			44. メボソムシクイ			*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	
			45. エゾムシクイ		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	
			46. センダイムシクイ			*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	
			47. キクイタダキ			*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	
			48. キビタキ	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	
			49. オオルリ	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	
			50. サメビタキ	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	
			51. エナガ			*	*			*	*		*	*	*	
	シジュウカラ	シジュウカラ	52. コガラ		*	*			*	*	*	*	*	*		
			53. ヒガラ		*	*			*	*	*	*	*	*		
			54. ヤマガラ		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*		
55. シジュウカラ			*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*			
56. ゴジュウカラ			*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*			
メジロ	57. メジロ	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*				
ホオジロ	ホオジロ	58. ホオジロ	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*			
		59. カシラダカ			*	*	*	*	*	*	*	*	*			
		60. ノジコ	*		*	*	*	*	*	*	*	*	*			
		61. アオジ			*	*	*	*	*	*	*	*	*			
		62. クロジ			*	*	*	*	*	*	*	*	*			
アトリ	アトリ	63. カワラヒワ	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*			
		64. ウソ			*	*	*	*	*	*	*	*	*			
		65. イカル	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*			
ハタオリドリ	66. スズメ	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*				
カラス	カラス	67. カケス		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*			
		68. ホシガラス		*	*	*	*	*	*	*	*	*	*			
		69. ハシブトガラス	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*			
8目	25科	69種	26	22	42	24	13	22	12	16	17	19				

注) a:清水集落 b:集落～桜坂 c:桜坂～井戸尾根～山頂 d:桜坂～割引沢～山頂  
 ○1991年6月2日に清水集落で行われた新潟県支部総会の探鳥会で観察された種も含めた。

十分あるだろう。繁殖期の出現種をみると、特に本山岳を特徴づけるような種類は見あたらない。ガンカモ目（2種）、ワシタカ目（6種）、カモメ目（2種）、ハト目（2種）、ホトトギス目（4種）などの種類は、本県の他の山岳でも広く出現するものである。ブッポウソウ目ではアカショウビンが、キツツキ目ではオオアカゲラが確認されなかったが、両種ともよく発達したブナ林やミズナラ林などの落葉広葉樹林に好んで生息するだけに、清水集落の登川に面した森林に生息している可能性はある。また、スズメ目ではやはりブ

ナ林帯に多いマミジロが確認されなかった。これらも今後の調査によって確認される公算は強いが、本山岳の自然林の乏しさを考慮するとこれらの生息数は本来少なく、今回のような短期間の調査では記録されなかったということも考えられる。本山岳にはオオシラビソなどからなる亜高山性針葉樹林が分布するため、カヤクグリ、キクイタダキ、ホシガラスなどがいずれも本植生帯で観察されており、コマドリの生息も確認された。また、山頂近くの岩場やガレ場の存在によって、イワヒバリも本山岳に生息していることが明らかにな

表3 集落・桜坂付近の出現鳥類の個体数と優占度

清水集落付近（600 m）				集落～桜坂（600～740 m）			
人家・河川・二次林				クリ・リュウブ等二次林			
種	個体数	個体数/時	優占度	種	個体数	個体数/時	優占度
ツバメ	9	7.5	14.5	ホオジロ	10	12.5	19.6
スズメ	7	5.8	11.3	メジロ	6	7.5	11.8
キセキレイ	6	5.0	9.7	ウグイス	5	6.3	9.8
ホオジロ	6	5.0	9.7	ヒヨドリ	4	5.0	7.8
ヒヨドリ	5	4.2	8.1	キセキレイ	3	3.8	5.9
カワガラス	3	2.5	4.8	ブッポウソウ	2	2.5	3.9
カワラヒワ	3	2.5	4.8	ツバメ	2	2.5	3.9
ハシブトガラス	3	2.5	4.8	サンショウクイ	2	2.5	3.9
セグロセキレイ	2	1.7	3.2	カワラヒワ	2	2.5	3.9
イソシギ	2	1.7	3.2	イカル	2	2.5	3.9
ウグイス	2	1.7	3.2	スズメ	2	2.5	3.9
メジロ	2	1.7	3.2	カケス	2	2.5	3.9
オオルリ	2	1.7	3.2	ハイブトガラス	2	2.5	3.9
キジバト	1	0.8	1.6	アオゲラ	1	1.3	2.0
コゲラ	1	0.8	1.6	ヤブサメ	1	1.3	2.0
サンショウクイ	1	0.8	1.6	エゾムシクイ	1	1.3	2.0
ホトトギス	1	0.8	1.6	オオルリ	1	1.3	2.0
イワツバメ	1	0.8	1.6	ヒガラ	1	1.3	2.0
ヤブサメ	1	0.8	1.6	シジュウカラ	1	1.3	2.0
キビタキ	1	0.8	1.6	コゲラ	1	1.3	2.0
ヤマガラ	1	0.8	1.6	ヤマガラ	1	1.3	2.0
イカル	1	0.8	1.6	ツツドリ	(1)	—	—
オシドリ	(2)	—	—	クロツグミ	(1)	—	—
ブッポウソウ	(4)	—	—				
カッコウ	(1)	—	—				
イカルチドリ	(1)	—	—				
26 種	62	51.7	100	23 種	51	63.8	100

(註) ① 2回以上調査したコースの各鳥種の個体数は多い方を採用した（他のコースも同様）。

② ( ) 内の個体数は調査範囲外に出現したもの。

った。

## II 個体数密度と分布

### 1. 集落・桜坂付近

巻機山の登山口にあたる清水集落は標高約600 mにある。人家は集落のほぼ中央部に集中し、周辺にはブナなどの山林、スギ林、水田、河川などが集落を囲むようにして存在する。集落から巻機山2合目にあたる桜坂までは約2 kmの二次林が続く。これらの地域の出現鳥類は合計36種、密度は56.5羽/時である。以下各地域毎に示す(表3)。

#### (1) 集落付近(標高600 m)

清水集落の西側を登川の清流が流れ、その河畔には高木のシロヤナギが見られる。対岸の山腹は高木のブナやカエデ類などからなる落葉広葉樹林によって覆われている。集落内には畑や水田も若干含まれるほか、スギ林も目立つ。

出現鳥類は27種、密度は51.7羽/時である。優占度は集落内に生息する、ツバメ、スズメ、キセキレイの順に高いが、低山地域の山林に生息するヒヨドリやホオジロの優占度も高く、これら上位5種で全体の約半数(53.3%)を占める。また、登川にはカワガラス、イソシギ、イカルチドリ、オシドリ、セグロセキレイも出現した。桜坂に向かう集落の上方には、かなり良好なブナ林が存在するが、そこに生息すると思われるブッポウソウが常に観察されるのもこの特徴である。

#### (2) 集落～桜坂(標高600～740 m)

スギ林とその造林地の他に、クリ、リョウブ、ウリハダカエデなどから成る二次林が主体の地域で、山小屋や駐車場などの人工構築物も含まれる。しかし、標高700～750 mの桜坂周辺の二子沢や割引沢の河原にはトチ、サワグルミ、ブナなどの高木を交えた溪畔林も分布する。

出現鳥類は27種、密度は63.8羽/時である。スズメ、ツバメ、カララヒワなどの集落付近

の優占種がまだ一部出現するが、優占度上位はホオジロ、メジロ、ウグイス、ヒヨドリなど、いずれも低山地域の二次林に多い種類が優占する。優占度上位5種の合計優占度は35.1%である。

### 2. 井戸尾根コース

本山岳の登山コースの中心となるこのコースは、標高740 mから山頂の1967 mまでの区間である。低標高地域はブナ、ミズナラなどの垂高木林、途中1200 mから1500 m間に分布するブナ林を経て、さらに上部の低木群落、風衝草原、オオシラビソ林など、標高と植生の変化に対応して出現鳥類も多く、合計43種、23.8羽/時が記録された(表4)。

#### (1) 2合目～5合目(標高750～1128 m)

巻機山の登りに入る2合目から標高1000 mを越す5合目までの区間は、3合目(820 m)付近までは、ミズナラ、ウワミズザクラ、ハウチワカエデ、ムシカリなどの垂高木が主な二次林である。840 m付近から所々ブナ林が現れるが、まだミズナラ、カエデ類などが混交し、標高を増すにつれてタニウツギ、リョウブ、マルバマンサク、ムシカリなどの垂高木、低木林になる。

出現鳥類は24種、密度は40.0羽/時である。優占度はホオジロ、メジロ、ヒヨドリなど、いずれも二次林地域に多い種類が上位を占めるが、標高を増すにつれて、メボソムシクイ、コガラ、カケスなどが多く出現するようになった。優占度上位5種の合計優占度は51.6%である。

#### (2) 5合目～7合目(標高1128～1564 m)

標高1200～1500 mの間にブナ林が出現するが、下部のブナ林はかなり樹高もあり、垂高木層、低木層の発達した比較的林相状態のよいブナ林である。一方、上部のブナ林は樹高も低く、ミヤマナラ、マルバマンサク、ムシカリ、タニウツギなどが混交する低木林である。

出現鳥類は28種、密度は28.0羽/時である。

表4 井戸尾根コースの出現鳥類の個体数と優占度

2合目～5合目（740～1128m）				5合目～7合目（740～1564m）			
ブナ・ミズナラ等二次林				ブナ等二次林・ブナ林			
種	個体数	個体数/時	優占度	種	個体数	個体数/時	優占度
ホオジロ	6	4.3	10.9	ウグイス	7	3.5	12.5
メジロ	6	4.3	10.9	ヒガラ	7	3.5	12.5
ヒヨドリ	5	3.6	9.1	コルリ	5	2.5	8.9
メボソムシクイ	4	2.9	7.3	キビタキ	5	2.5	8.9
カケス	4	2.9	7.3	カケス	4	2.0	7.1
コガラ	4	2.9	7.3	シジュウカラ	4	2.0	7.1
ヤブサメ	3	2.1	5.5	クロジ	4	2.0	7.1
ウグイス	3	2.1	5.5	ホトトギス	3	1.5	5.4
シジュウカラ	3	2.1	5.5	ウソ	3	1.5	5.4
ホトトギス	2	1.4	3.6	ミソサザイ	2	1.0	3.6
コルリ	2	1.4	3.6	ジュウイチ	2	1.0	3.6
オオルリ	2	1.4	3.6	ツツドリ	1	0.5	1.8
クロツグミ	2	1.4	3.6	アオゲラ	1	0.5	1.8
ツツドリ	1	0.7	1.8	ホオジロ	1	0.5	1.8
アオゲラ	1	0.7	1.8	オオルリ	1	0.5	1.8
ハシブトガラス	1	0.7	1.8	ビンズイ	1	0.5	1.8
キビタキ	1	0.7	1.8	アカゲラ	1	0.5	1.8
キセキレイ	1	0.7	1.8	トビ	1	0.5	1.8
センダイムシクイ	1	0.7	1.8	イワツバメ	1	0.5	1.8
トラツグミ	1	0.7	1.8	ホシガラス	1	0.5	1.8
アカゲラ	1	0.7	1.8	イカル	1	0.5	1.8
コゲラ	1	0.7	1.8	カッコウ	(1)	—	—
アオバト	(1)	—	—	ツツドリ	(1)	—	—
				ホトトギス	(1)	—	—
				コガラ	(1)	—	—
				キクイタダキ	(1)	—	—
				コマドリ	(1)	—	—
				オオタカ	(1)	—	—
23 種	55	40.0	100	28 種	56	28.0	100

7合目～9合目（1564～1867m）				9合目～山頂（1867～1967m）			
ミヤマナラ等低木林・草原				風衝草原・オオシラビン体			
種	個体数	個体数/時	優占度	種	個体数	個体数/時	優占度
ウグイス	3	2.1	23.1	ウグイス	4	4.0	40.0
ウソ	3	2.1	23.1	ウソ	2	2.0	20.0
クロジ	2	1.4	15.4	イワヒバリ	2	2.0	20.0
ホトトギス	1	0.7	7.7	メボソムシクイ	1	1.0	10.0
カケス	1	0.7	7.7	カヤクグリ	1	1.0	10.0
ビンズイ	1	0.7	7.7	ビンズイ	1	1.0	10.0
メボソムシクイ	1	0.7	7.7	ツバメ	(3)	—	—
カヤクグリ	1	0.7	7.7	ホオジロ	(1)	—	—
キセキレイ	1	0.7	7.7	ホシガラス	(1)	—	—
9 種	14	10.0	100	9 種	11	11.0	100



優占度上位5種は、ウグイス、ヒガラ、コルリ、キビタキ、カケス、シジュウカラ、クロジの順で、これらの合計優占度は64.1%になる。ウグイス以外はほとんどブナ林帯に多く出現する種類で、本山岳の中では最も鳥相の豊かな区間といえる。このブナ林帯における出現種類数と個体数密度は、例えば垂高木・低木林が主体の守門岳ブナ林帯の24種、20.4羽/時(渡辺, 1992)や苗場山のブナ林の25種、29.0羽/時(本間, 1970)などとはほぼ同等か、それを上回るが、成林状態のブナ・ミズナラ林が広範囲に分布する三国峠地域の37種、57.1羽/時(渡辺, 印刷中)などと比較するとかなり低い。

### (3) 7合目～9合目(標高1564～1867m)

ミヤマナラ、ダケカンバ、ハクサンシャクナゲ、チシマザサなどの風衝低木群落为主体となる。9合目は前巻機山、あるいはニセ巻機山と呼ばれるピークで、この付近にはミツバオウレンやスゲ類などの風衝草原も発達する。

出現鳥類は9種、密度は10.0羽/時で、鳥相は一気に貧弱になる。優占度はウグイス、ウソ、クロジの順で、これら上位3種で全体の61.6%を占める。

### (4) 9合目～巻機山山頂(標高1867～1967m)

前巻機山から山頂への鞍部はチシマザサ、ヌマガヤなどからなる雪田草原や風衝低木群落が一面に広がり、そこにオオシラビソ林が出現する。鞍部のオオシラビソ林は強い季節風の影響を受けて樹高がおさえられた風衝型が多く、分布も疎らであるが、山頂の南西斜面にはかなりまとまったオオシラビソ林が広がる。

出現鳥類は9種、密度は11.0羽/時で、7合目からの鳥相と大きな変化はない。優占種はウグイスで、ウソ、イワヒバリがそれに続き、これら3種で全体の80.0%を占める。巻機山ではオオシラビソ林の分布がごく疎らで

あるため、これら針葉樹林に対応する鳥類の密度は、例えば苗場山の針葉樹林帯(45.0羽/時)などと比較するときわめて低いものである。ここではむしろ風衝低木群落に対応した鳥類が主体であるといえる。

### 3. 割引沢コース

桜坂(2合目)から割引沢を登り山頂に至るこの沢コースは、1989年7月に1回の調査を行っている。出現鳥類は合計26種、密度は9.6羽/時である。つまり尾根コースに比べて周囲の樹林が極端に少ない沢の鳥相はきわめて貧弱なことがわかった(表5)。

#### (1) 桜坂～割引沢出合(標高750～1128m)

沢の東山斜面の上方を沢に沿って細い道が避難道として続く。下部は井戸尾根と同様に二次林であるが、標高を増すとサワグルミ、トチ、ミズナラ、ブナなどの高木林が出現する。

出現鳥類は20種、密度は12.9羽/時である。優占度はホオジロ、ヒヨドリ、メジロの3種が高く、これらの合計優占度は51.6%になる。その他ミズナラやブナ林にはコゲラ、オオルリが出現し、ゴジュウカラは標高900mのサワグルミ林に、またクロジは標高970mの低木林が発達したブナ林に出現した。

#### (2) 割引沢出合～尾根出合下部(標高1128～1520m)

沢に入ると両岸は急峻な崖となり、ブナなどの高木や垂高木林は上部の緩斜面に見られるだけで、沢の急斜面には雪崩植生であるタニウツギ、ヤマモミジなどの低木林やスゲ類などの草木類が生育する。

出現鳥類は9種であるが調査範囲内(半径50m)では4種、密度は7.5羽/時である。優占度はウグイス、キセキレイ、ミソサザイ、ビンズイの順で、上位3種で93.3%を占める。その他の出現種であるホオジロ、クロジなどはいずれも調査範囲外の樹林部からさえずりが聞かれたものである。

表5 割引沢コースの出現鳥類の個体数と優占度

2合目～沢出合（740～1128m）				沢出合～尾根出合下部（1128～1520m）			
二次林・サワグルミ・ブナ林				雪崩植生（低木林・スゲ類）			
種	個体数	個体数/時	優占度	種	個体数	個体数/時	優占度
ホオジロ	7	2.9	22.6	ウグイス	6	3.0	40.0
ヒヨドリ	5	2.1	16.1	キセキレイ	5	2.5	33.3
メジロ	4	1.7	12.9	ミソサザイ	3	1.5	20.0
コゲラ	2	0.8	6.5	ビンズイ	1	0.5	6.7
ヤブサメ	2	0.8	6.5	クロジ	(3)	—	—
オオルリ	2	0.8	6.5	ホオジロ	(2)	—	—
ゴジュウカラ	2	0.8	6.5	カッコウ	(1)	—	—
ウグイス	1	0.4	3.2	メボソムシクイ	(1)	—	—
モズ	1	0.4	3.2	ウソ	(1)	—	—
ミソサザイ	1	0.4	3.2				
サンショウクイ	1	0.4	3.2				
センダイムシクイ	1	0.4	3.2				
シジュウカラ	1	0.4	3.2				
クロジ	1	0.4	3.2				
ハシブトガラス	(2)	—	—				
ノスリ	(1)	—	—				
アオゲラ	(1)	—	—				
クログミ	(1)	—	—				
キジバト	(1)	—	—				
カワラヒワ	(1)	—	—				
20 種	31	12.9	100	9 種	15	7.5	100

尾根出合下部～尾根出合（1520～1760m）				尾根出合～割引岳山頂（1760～1930m）			
低木林・チシマザサ・草原				チシマザサ・風衝草原			
種	個体数	個体数/時	優占度	種	個体数	個体数/時	優占度
モズ	1	0.8	100	ツバメ	(3)	—	—
ウグイス	(2)	—	—	ウグイス	(2)	—	—
ビンズイ	(1)	—	—				
メボソムシクイ	(1)	—	—				
4 種	1	0.8	100	2 種	0	0	0

(3) 尾根出合下部～尾根出合（標高1520～1760m）

沢上部から尾根へ急登する付近は、岩やれき地が多くなり、チシマザサなどの風衝低木林や草原が出現する。

出現鳥類は4種を記録したに留まり、そのうち半径50mの範囲に出現したのはモズただ1種にすぎなかった。さらに上部の尾根筋からはウグイス、メボソムシクイ、ビンズイの鳴き声が聞かれた。

(4) 尾根出合～割引岳山頂（標高1760～1930m）

チシマザサ、風衝草原からなる割引岳山頂への区間では、上空にアマツバメが出現したが調査範囲以内には出現した鳥類はなかった。

## ま と め

1989～1990年の調査によって69種の鳥類が記録された。そのうち繁殖期（5～7月）の出現鳥類は52種を数えたが、今後の調査によってさらに増えることも予測された。これらの鳥類の中には、特に本山岳に限って生息しているような種は見当たらず、県内の諸山岳に分布する種類とほぼ共通していた。それは樹林性の鳥類が最も豊かであるといわれるブナ林域の出現鳥類をみても同様で、ウグイスーヒガラーコルリーキビタキが優占していたが、それらの密度も特に注目すべき傾向は認められなかった。

山頂付近に断続的ながら分布するオオシラビソ林は、これらの少ない県内の山岳の中では貴重な存在で、湿性草原などとともにその保護を強く痛感した。それは本植生帯に分布していた亜高山性のカヤクグリ、キクイタダキ、ホシガラス、コマドリ、ビンズイなどの密度がきわめて低く、残されたこれらの植生帯にかろうじて分布しているように思われたからである。山頂付近では最近この植生の破壊が進んでいるということで、その回復をはかる試みが積極的に行われている。これらの

回復、保全が今後の鳥類の生息にとっても重要であることはいうまでもない。

## 参考文献

- 千葉 晃（1972）：鳥だより その1 巻機山探鳥記. 野鳥新潟, 22: 4-5.
- 本間隆平（1970）：苗場山の野鳥. 妙高山および苗場山周辺における鳥類の生息状況調査報告書, 新潟県農林部: 37-60.
- 西山邦夫（1983）：植物のすぐれた自然・巻機山. 新潟のすぐれた自然, 新潟県: 576 pp.
- 小笠原嵩（1967）：会津駒ヶ岳の鳥類調査. 日本自然保護協会調査報告, 29: 95-114.
- 渡辺 央（1992）：守門岳の鳥類（繁殖期）. 長岡市立科学博物館研究報告, 27: 73-84.
- 渡辺 通（1991）：日尊の倉山の鳥類. 四季のつどい, 17: 18-23.

# 菅名岳の鳥類

山本 明\*・渡辺範雄・小野島学（\*執筆）

## はじめに

菅名岳（909.2 m）は新潟平野に面した低い山岳ではあるが、相当広い面積のブナの自然林をはじめ、珍しいカツラの自然林など、そのすぐれた貴重な自然植生が注目され、この山域の自然環境を保全する運動も展開されてきた。

菅名岳の鳥類については、新潟県野鳥愛護会が新潟県の委託を受けて、1987年に調査したがまだその結果は公表されていない。他には本格的な調査はされていない。当支部はこの山域の環境保全の重要性から、1990～1991年に鳥類についての調査を行った。調査参加者などの都合もあって十分とは言えないが、一応の調査結果をここに報告する。

この調査に当たり、五泉市職員の林 公史氏には宿泊の便宜・現地案内・資料の提供など、多大なご支援を受けた。また、本会会員

（支部会員）で五泉市在住の塚野金松・宮崎増次の両氏からは、これまでの観察資料や菅名岳に関する種々の資料の提供などのご支援を受けた。これらの方々に深く謝意を表すものである。

## 調査地および調査コース

菅名岳の山麓はスギの人工林が多く、他は常緑広葉樹も少し点在するが、殆どは落葉広葉樹（以下単に「広葉樹」）の二次林である。標高が増すに従ってスギ林が減り、広葉樹二次林の自然林となる。中腹以上がブナ林で、菅名岳の西面から大蔵岳の北面に囲まれた山腹は、相当広範囲にブナ林が分布し、中腹および新江川上流の沢沿いにはかなりの大径木も見られる（図1）。しかし山頂や稜線付近は風衝樹林となり、ブナを主とする広葉樹が低木林状に生育している（図2）。また新江川上流の沢沿いには原生林状の自然林も存在

表1 菅名岳の調査年月日・調査コース・調査者

調査年月日	調査時刻	天候	距離(k)	調査コース	調査者
1990. 6. 8	4:47～11:52	晴	5.1	林道・三五郎山線ゲート～丸山尾根～菅名岳, 新江川上流	小野島学・山本 明 ・渡辺範雄
10. 31	9:12～14:01	晴	5.1	林道・三五郎山線ゲート～丸山尾根～菅名岳, 新江川上流	小野島学・山本 明 ・渡辺範雄
1991. 4. 19	8:33～11:15	晴	4.2	いずみの里入口～林道・三五郎山線～丸山尾根	山本 明・渡辺範雄
5. 24	11:25～15:33	晴	2.0	新江川上流	山本 明・渡辺範雄
5. 25	4:30～11:38	晴	10.4	いずみの里入口～林道・三五郎山線～丸山尾根～菅名岳～大蔵岳～林道・三五郎山支線始点	小野島学・山本 明 ・渡辺範雄

する（図3）。

調査コースは図4に示す通り、いずみの里から林道「三五郎山線」を経て、菅名岳登山道に入り、新江川の沢筋から丸山尾根を辿って菅名岳山頂までとし、帰路は標高510mのユキツバキ平から新江川に下り、そこから下手へ丸山尾根登山道への登り口までとったが、91.5/25には付随的に菅名岳～大蔵岳稜線の縦走路と、大蔵岳山頂から麓の林道「三五郎山支線」の始点まで調査した。これらの調査状況を表1に示す。



図1 大蔵岳中腹（600m付近）のブナ林

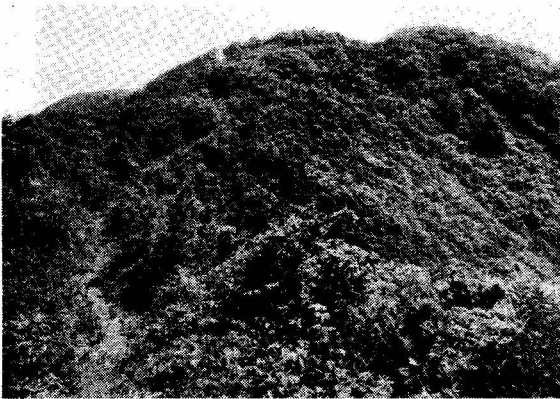


図2 菅名岳～大蔵岳の稜線縦走路付近の風衝樹林



図3 新江川上流の原生林状の自然林

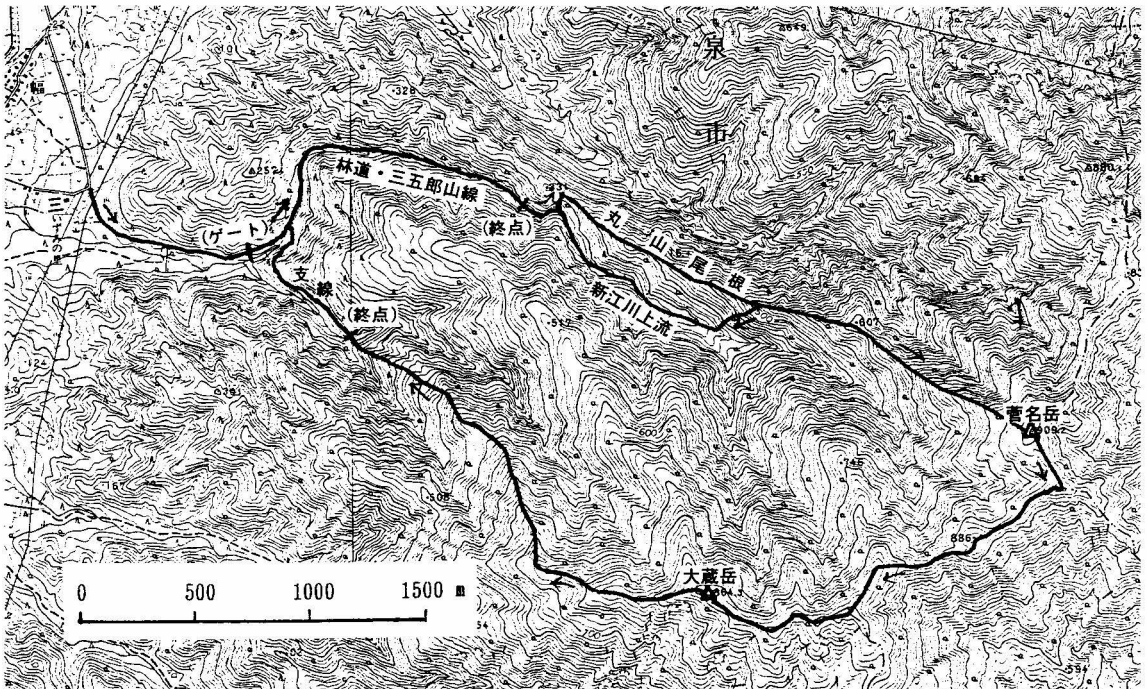


図4 調査コース（国土地理院1/25000地図より）

## 調査方法

調査コースの片側50m両側で100mの範囲に出現する鳥類をすべて記録するライントランセクト法によった。この範囲外に出現した鳥類も記録したが、まとめる際にそれらは出現種数には加えたが、密度などの算出に当たっては除外した。なお、5月と6月の調査は繁殖期、4月と10月を非繁殖期とした。

## 結果と考察

### I 鳥類相の概要

調査時に出現した全鳥種と、調査時には出現しなかったが近年観察されたものも含めて表2に掲げた。全体で8目22科69種となったが、今後未出現種が観察される可能性もあり、種数はまだ増えるであろう。

非繁殖期にだけ出現したのは13種であるが、このうちカルガモ・ヤマドリ・モズ・カワラヒワは繁殖期も生息が推定されるもので、他は冬鳥のジョウビタキ・シロハラ・ツグミ・カシラダカ・マヒワ・ベニマシコ・シメなどと、旅鳥のノゴマ、それにクイタダキ・クロジである。クイタダキとクロジは繁殖期は普通1000m以上の針葉樹林（クイタダキ）やササ藪のあるブナ林（クロジ）に生息し、非繁殖期は平地や暖地に移動する。両種とも生息地が限定されていることもあり、菅名岳の環境からみて生息の可能性は少ないようであるが、春・秋には滞留ないし通過することが確かめられた。

繁殖期の出現鳥類56種は、標高1538mの守門岳（62種）には及ばないが、1262mの日尊の倉山（59種）に近く、1962mの巻機山（52種）より多い。標高909mの低山帯上部までしかない山岳としては多い方であろう。これはブナ林や原生林の存在と豊かな植物相によるものと思われる。6月の調査時にはユキツバキ平付近でアカショウビンとアオバトの声も聞かれた。

繁殖期の出現種の中には、5月の調査時には出現したが、6月の調査時には出現しなかったものもあり、まだ移動中のものもいるようである。従ってこの時期の出現種全てが定着して繁殖しているとは限らないであろう。

山域全体としては、この地方における丘陵帯（里山）および低山帯ブナ林の鳥類相を示しており、特に菅名岳の中腹から山頂にかけてブナ林の鳥類相がよく現れている。

注目される種もいくつか観察された。その一つはホシガラスで、本種は繁殖期は普通亜高山帯に生息するが、5/24の調査時に菅名岳と大蔵岳の2カ所で、いずれも標高700m付近に出現している。前年の6/8の調査時には出現していないので、5月下旬はまだ移動中なのかどうか、関心のもたれるところである。次に、同じく5/24の調査時に菅名岳～大蔵岳の稜線上にウソが出現している。ウソも繁殖期は亜高山帯に生息するので、やはりこの時期まだ移動中だったのかどうか。また、アオジは当地方では普通旅鳥で、少数は低山帯上部でも繁殖している。5/24に新江川上流で観察されたが、ここで繁殖しているのかどうかである。またブナ林に生息するマミジロは、最近個体数の減少が指摘されている。菅名岳では87.6/28に丸山尾根のユキツバキ平の上部付近で観察されているが（塚野氏私信）、今回の調査では大蔵岳山腹（700～800m）で雄雌とみられる2個体が出現し、その生息が確かめられた。なお、同じくブナ林に生息するオオアカゲラは、6/8の調査時にそれらしきドラミングを聞いたが、確認するに至らなかった。これだけのブナ林があるので、生息の可能性はある。これらについては今後の調査の課題であろう。

### II 個体数密度と分布

繁殖期の個体数密度と分布を植生の概要と共に、コース区分ごとにみてゆくことにする。

表2 菅名岳の出現鳥類と出現時期および出現地域

目	科	種	繁殖期（5月～6月）					4月		10月			
			a	b	c	d	e	a	b	a	b	c	
ガンカモ	ガンカモ	1. オシドリ	*					*					
		2. カルガモ						*					
ワシタカ	ワシタカ	3. ミサゴ			(*)								
		4. トビ	*					*		*			
		5. ハイタカ			(*)								
		6. サシバ	*										
キジ	キジ	7. ヤマドリ									(*)		
		8. キジ	(*)										
ハト	ハト	9. キジバト	*	*		*				*			
		10. アオバト			*								
ホトトギス	ホトトギス	11. ジュウイチ			*	*							
		12. カッコウ			*								
		13. ツドリ			*	*	*						
		14. ホトトギス		*	*	*							
ブッポウソウ	カワセミ	15. アカシヨウビン			*								
		16. カワセミ	(*)										
キツツキ	キツツキ	17. アオゲラ			*		*		*				
		18. アカゲラ			*		*		*				
		19. コゲラ	*		*			*	*				
スズメ	ツバメ	20. ツバメ	(*)		(*)								
		21. イワツバメ	*										
	セキレイ	22. キセキレイ	*	*									
		23. ハクセキレイ	(*)										
		24. セグロセキレイ	(*)										
	サンショウクイ	25. サンショウクイ	*				*						
	ヒヨドリ	26. ヒヨドリ	*	*	*		*	*	*	*	*	*	
	モズ	27. モズ						*					
	カワガラス	28. カワガラス	*	*				*		*	*		
	ミソサザイ	29. ミソサザイ	*	*				*		*	*	*	
	ヒタキ	30. ノゴマ							(*)				
		31. コルリ		*		*	*						
		32. ジョウビタキ				*	*						*
		33. マミジロ					*						
		34. トラツグミ			*								
		35. クロツグミ	*	*	*								
		36. アカハラ	(*)										
		37. シロハラ									*	*	*
		38. ツグミ											*
		39. ヤブサメ	*	*	*								*
40. ウグイス		*		*	*	*	*	*	*	*	*	*	
41. メボソムシクイ				*	*	*						*	
42. センダイムシクイ				*	*	*			*	*		*	
43. キクイタダキ				*	*	*			*	*		*	
44. キビタキ			*	*	*		*					*	
45. オオルリ		*	*	*	*	*						*	
46. サメビタキ		*	*	*	*						*		
47. コサメビタキ		*	*	*	*						*		
48. サンコウチョウ	(*)					*					*		
エナガ	49. エナガ			*								*	
シジュウカラ	50. コガラ			*		*			*	*		*	
	51. ヒガラ	*		*	*	*		*	*	*		*	
	52. ヤマガラ	*	*	*	*	*		*	*	*		*	
ゴジュウカラ	53. シジュウカラ	*	*	*	*	*		*	*	*	*	*	
	54. ゴジュウカラ	*	*	*	*	*		*	*	*	*	*	
メジロ	55. メジロ			*				*					
ホオジロ	56. ホオジロ	*		*	*	*	*	*		*			
	57. カシラダカ				*	*	*	*	*	*	*	*	
	58. アオジ		*				*	*	*	*	*	*	
	59. クロジ						*	*	*	*	*	*	
アトリ	60. カワラヒワ						*	*	*	*	*	*	
	61. マヒワ							*	*	*	*	*	
	62. ベニマシコ							*	*	*	*	*	
	63. ウソ				*	*		*	*	*	*	*	
	64. イカル	*		*		*		*	*	*	*	*	
シメ	65. シメ										(*)		
カラス	66. カケス	*		*	*	*	*	*	*	*	*	*	
	67. ホシガラス	*		*	*	*	*	*	*	*	*	*	
	68. ハシボソガラス	*		*	*	*	*	*	*	*	*	*	
	69. ハシブトガラス	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	
8目	22科	69種	29	16	36	11	18	18	16	15	7	17	

注) 1. a: 山麓部 b: 新江川上流 c: 菅名岳中腹～山頂 d: 菅名岳～大蔵岳縦走路 e: 大蔵岳山頂～中腹  
 2. (\*)は今回の調査では出現しなかったが、近年観察されているもの。

1. 山麓付近 (標高50~270 m)

林道沿いに新江川の谷筋はスギの人工林が多く、その大部分は成林しているが、所々に疎林や幼令林もある。他はナラ類・ヤマハンノキ類・イタヤカエデ類など広葉樹の二次林であるが、高木となっても疎林状に生育している所や、低木層となっている所も多い。

このコース区分は、いずみの里入口から林道を経て新江川より丸山尾根への登り口までとした。今回の調査では表3の通り、22種が出現し、密度は54.4羽/時でコース区分の中

では最も多かった。ここではヒヨドリ・ホオジロ (この2種で50%以上) が優占する丘陵帯 (里山) の鳥類群集を示している。

塚野氏が1967年の繁殖期 (5/31) に、林道のゲート付近でサンコウチョウを観察されているが、今回の調査では2回とも出現しなかった。なお、他にこれまでキジ・カワセミ・ツバメ・ハクセキレイ・セグロセキレイ・アカハラなど近年観察されている (塚野氏および宮崎氏の私信)。これらはこのコース付近とは限らないが、山麓ということで表2に

表3 菅名岳山麓付近および新江川上流付近の出現鳥類の個体数と密度 (繁殖期)

山麓部 (50~270 m)				ユキツバキ平~新江川上流 (500~270 m)			
スギ人工林~二次林・河川				落葉広葉樹原生林・河川			
種	個体数	個体数/時	優占度	種	個体数	個体数/時	優占度
ヒヨドリ	20	16.0	29.4	ミソサザイ	6	6.2	19.4
ホオジロ	17	13.6	25.0	ヤマガラ	6	6.2	19.4
キジバト	5	4.0	7.4	ヒヨドリ	5	5.2	16.1
ヤブサメ	4	3.2	5.9	コゲラ	2	2.1	6.5
キセキレイ	3	2.4	4.4	キビタキ	2	2.1	6.5
ウグイス	3	2.4	4.4	オオルリ	2	2.1	6.5
シジュウカラ	3	2.4	4.4	ゴジュウカラ	2	2.1	6.5
オシドリ	2	1.6	2.9	ホトトギス	1	1.0	3.2
カワガラス	2	1.6	2.9	カワガラス	1	1.0	3.2
ヒガラ	2	1.6	2.9	クロツグミ	1	1.0	3.2
カケス	2	1.6	2.9	ヤブサメ	1	1.0	3.2
イワツバメ	1	0.8	1.5	アオジ	1	1.0	3.2
ミソサザイ	1	0.8	1.5	ハシブトガラス	1	1.0	3.2
オオルリ	1	0.8	1.5	キジバト	(1)	-	-
ヤマガラ	1	0.8	1.5	キセキレイ	(1)	-	-
イカル	1	0.8	1.5	シジュウカラ	(1)	-	-
トビ	(2)	-	-				
ハシブトガラス	(2)	-	-	16 種	31	32.1	100
サシバ	(1)	-	-	〔1.2 km 58分〕			
コゲラ	(1)	-	-	〔註〕① 2回調査したコースでは、各鳥種の個体数は多い方を採用した。			
サンショウクイ	(1)	-	-	② ( ) 内の個体数は調査範囲外に出現したもの。			
クロツグミ	(1)	-	-				
22 種	68	54.4	100				

(2.8 km 75分)



表4 菅名岳下部および中腹～山頂付近の出現鳥類の個体数と密度 (繁殖期)

菅名岳下部 (270～450 m)				菅名岳中腹～山頂 (450～909 m)			
スギ幼令林・二次林				ブナ林			
種	個体数	個体数/時	優占度	種	個体数	個体数/時	優占度
ヒヨドリ	6	12.9	26.1	シジュウカラ	12	7.7	15.4
ウグイス	4	8.6	17.4	ヒガラ	8	5.2	10.3
ホオジロ	4	8.6	17.4	キビタキ	7	4.5	9.0
メジロ	2	4.3	8.7	ヒヨドリ	5	3.2	6.4
ヤマガラ	2	4.3	8.7	エナガ	5	3.2	6.4
カケス	2	4.3	8.7	ゴジュウカラ	5	3.2	6.4
ホトトギス	1	2.1	4.3	ツツドリ	3	1.9	3.8
コサメビタキ	1	2.1	4.3	アカゲラ	3	1.9	3.8
イカル	1	2.1	4.3	コルリ	3	1.9	3.8
ツツドリ	(2)	—	—	クロツグミ	3	1.9	3.8
アオゲラ	(2)	—	—	メボソムシクイ	3	1.9	3.8
ジュウイチ	(1)	—	—	メジロ	3	1.9	3.8
カッコウ	(1)	—	—	ヤマガラ	3	1.9	3.8
クロツグミ	(1)	—	—	ホトトギス	2	1.3	2.6
キビタキ	(1)	—	—	ヤブサメ	2	1.3	2.6
オオルリ	(1)	—	—	センダイムシクイ	2	1.3	2.6
16 種	23	49.3	100	サメビタキ	2	1.3	2.6
〔0.9 km 28分〕				コガラ	2	1.3	2.6
				イカル	2	1.3	2.6
				アオゲラ	1	0.6	1.3
				オオルリ	1	0.6	1.3
				ウグイス	1	0.6	1.3
				ジュウイチ	(1)	—	—
				カッコウ	(1)	—	—
				アオバト	(1)	—	—
				アカショウビン	(1)	—	—
				トラツグミ	(1)	—	—
				ホオジロ	(1)	—	—
				ホシガラス	(1)	—	—
				ハシボンガラス	(1)	—	—
				30 種	78	50.3	100

〔1.5 km 93分〕

含めた。

## 2. 新江川上流付近 (標高 270～500 m)

登山道の丸山尾根への登り口より上流は、カツラ・トチ・サワグルミ・ブナなどが優占する原生林状の自然林で、巨木も見られる。上流の奥へ入るに従いブナが多くなっている。

調査は、6/8に丸山尾根のユキツバキ平 (510 m) から下って、下手へ1.2 kmまでのセンサスを行った。

結果は表3に示す通り、16種が出現し相対的にミソサザイが多いのが目立つが、総体的な密度は32.1羽/時でそれほど高くはなかった。ミソサザイが多いのは、沢沿いの原生林に本種の生息に必要な環境 (根の露出した樹木が多いこと) があるためであろう。またこ

表5 菅名岳～大蔵岳縦走路および大蔵岳山頂～中腹付近の出現鳥類の個体数と密度（繁殖期）

菅名岳～大蔵岳縦走路（850～909 m）				大蔵岳山頂～中腹（864～500 m）			
ブナを主とする風衝樹林				ブナ林			
種	個体数	個体数/時	優占度	種	個体数	個体数/時	優占度
コルリ	10	9.2	32.3	ヒヨドリ	7	10.5	20.6
ウグイス	9	8.3	29.0	ホオジロ	4	6.0	11.8
シジュウカラ	6	5.5	19.4	シジュウカラ	3	4.5	8.8
ヒガラ	2	1.8	6.5	カケス	3	4.5	8.8
ジュウイチ	1	0.9	3.2	マミジロ	2	3.0	5.9
ホオジロ	1	0.9	3.2	ウグイス	2	3.0	5.9
ウソ	1	0.9	3.2	メボソムシクイ	2	3.0	5.9
カケス	1	0.9	3.2	ヒガラ	2	3.0	5.9
キジバト	(1)	—	—	ツツドリ	1	1.5	2.9
ツツドリ	(1)	—	—	アオゲラ	1	1.5	2.9
ホトトギス	(1)	—	—	アカゲラ	1	1.5	2.9
11 種	31	28.6	100	コルリ	1	1.5	2.9
				キビタキ	1	1.5	2.9
				コサメビタキ	1	1.5	2.9
				ゴジュウカラ	1	1.5	2.9
				イカル	1	1.5	2.9
				ホシガラス	1	1.5	2.9
				サンショウクイ	(1)	—	—
				18 種	34	51.0	100

〔2.2 km 65分〕

ここでゴジュウカラの巣立ち幼鳥が観察されて、その繁殖が確かめられた。

なお、翌年5/24にもこのセンサス区間より更に上流の奥の方へ遡行してみたが、特に注目される種は出現しなかった。

3. 菅名岳下部付近（標高270～450 m）

登山道の新江川上流から丸山尾根への登り口よりブナ林が現れる所までとした。距離が短く標高差も小さかったが、一応それより上のブナ林と区別した。ここは登り口の上から南斜面にスギの植林地がありまだ幼令林、所によって広葉樹が混生したり広葉樹の若い二次林となっている所もある。登山道の北側はミズナラを主としたブナも混じる小・中径木の二次林となっている。

鳥類の調査では表4の通り、16種が出現したが、センサス範囲内では少なかった。ヒヨドリ・ウグイス・ホオジロが相対的に多いことは、山麓部と同様な傾向を示している。

〔1.45 km 40分〕

4. 菅名岳中腹～山頂（標高450～909 m）

ブナ林が山頂まで続いており、特に510 mのユキツバキ平およびその上部一帯にはよく発達したブナ林があり、かなりの大径木も見られる。山頂に近づくとつれてブナの木は小さくなり、山頂付近は6 m以下の風衝樹林となっている。

このコースでは表4の通り30種が出現し、密度も50.3羽/時で山麓部コースに次いで高かった。ここでは相対的にカラ類（エナガ・シジュウカラ・ゴジュウカラ・キバシリ科の鳥）が多く45%、次いでヒタキ類（ヒタキ科の鳥）で約31%で、出現種数の多いことと共

共にブナ林の鳥類群集の特徴を示している。

センダイムシクイ・サメビタキは5/25だけ出現，メボソムシクイは5/25にも6/8にも出現しているが，これは亜種のコメボソムシクイのようで，これらはまだ渡りの途中とも考えられる。

なお，このコースで近年ミサゴ(87.6/28山頂付近で塚野氏)とハイタカ(90.5/20石部久氏)も観察されている。

#### 5. 菅名岳—大蔵岳稜線の縦走路付近(標高850～909 m)

ブナを主とする低木ないし亜高木の風衝樹林で，カエデ類・リョウブ・ムシカリ・ナナカマド・クロモジ・タムシバ・マルバマンサクなども生育している。

調査は5/25に1回だけ行った。結果は表5の通り，出現11種と密度25.8羽/時はコース区分の中で最も低く，貧弱な鳥類相を示している。コルリ・ウグイスが相対的に多かったのも低木層やブッシュの多い稜線の環境に起因しているものであろう。

なお，前記2種はいずれも単独雄の囀りで，この時期すでにテリトリーが形成されて，繁殖に入っているものと推定される。

#### 6. 大蔵岳山頂～山腹(標高864～500 m)

山頂より500 m付近までブナ林が続いている。所々途切れる部分があり，そこではミズナラを主とする広葉樹の自然林となっている。700 mより上には大きいブナは生育していないが，650 mより下方にかなり大径木も混じるよいブナ林がある。500 m以下はミズナラを主とする自然林も少し残っているが，多くはスギの植林地となっている。

調査は5/25，1回山頂より下りながら行った。麓まで調査の記録はとったが，まとめるに当たっては山頂から標高500 m付近のブナ林の尽きる所までとした。

結果は表5に示す通り，ここでは18種が出現し，35.3羽/時の密度となった。大体同じブナ林の環境である菅名岳に比べると，種数

・個体数共に少なく，カラ類が少ないこと，キビタキ・コルリも少なくクロツグミ・ヤブサメが出現しなかったことなど，かなり違いも見られるが，しかしこれは調査した時間帯の違いによるのかも知れないので，一回だけの調査で判断するのは無理であろう。もう少し詳しい調査を要するところである。

## ま と め

1990～91年に菅名岳・大蔵岳山域の鳥類調査を行って，これまでの記録と合わせ69種の鳥類が記録された。その中で繁殖期に出現したのは56種で，それら全てがこの山域で繁殖しているとは限らないものの，900 m程度の低山帯の山岳にしては比較的豊かな鳥類相を呈していると言えよう。それは山腹の相当面積のブナ林と新江川上流付近の原生林などの良好な生息環境に基づくものと思料される。

山麓から山頂まで，スギ林と広葉樹の二次林，新江川上流の原生林，山腹のブナ林，山頂から稜線の風衝樹林など，さまざまな植生環境があり，それらに対応して生息する鳥類群集をある程度把握することができた。

こうした鳥類群集と共に，菅名岳の優れた自然環境の保全を強く望むものである。

## 参考文献

- 石沢 進他(1980)：菅名岳のブナ林。昭和55年度 新潟県自然環境保全地域指定候補地調査報告書
- 平 慎三(1991)：菅名岳の植生。植物同好じねんじよ会，菅名岳の植物と動物(両性・爬虫・陸性貝類)，13-32。
- 中村登流(1988)：森と鳥と。142-156。
- 渡部 通(1991)：日尊の倉山の鳥類。四季のつどい，17:18-23。
- 渡辺 央(1992)：守門岳の鳥類(繁殖期)。長岡市立科学博物館研究報告27:73-84。

## 大潟町の都市公園化に伴う 朝日池・鶺ノ池とその周辺の環境保全運動について

保護部 山本 明

朝日池は鶺ノ池と共に、ガンカモ類をはじめ多くの水鳥類の渡来集落地であり、また周辺に秋から冬にかけて種々のワシタカ類も渡来出現する。春・秋は水辺をシギチドリ類、アシ原・樹林を多くの渡り鳥が通って行くなど、野鳥にとって貴重な自然となっている。

新潟県は'91年9月初め、この朝日池のある大潟町に、県営の都市公園を建設する計画を公表した。朝日池を含む5つの池を核として、周辺一帯250ヘクタールを対象としている。近くを北陸自動車道が通り、まだあまり開発されていない湖沼群があることが選定の理由となったようである。平成3年度中に基本計画を策定、4年度より工事着手を目指し、5カ年計画で平成7年度に完成を予定している。

都市公園は人手を加えない自然公園と違い、人手を加えて人々の積極的な利用を図るもので、大潟町の都市公園計画でも完成までに、総額200億円以上の建設費が見込まれている。

こうした状況をふまえ、91.9/28に役員会に保護部から、このことに対し県に要望書を出すことを提案して承認され、その処理は保護部に一任された。そこでまず県の主管部署である土木部都市整備局都市計画課公園緑地室を訪ねて状況を聞いた。担当者のお話では  
①これから委託したコンサルタントに基本計画を立ててもらうので、まだ具体的なことは何も決まっていない ②識者による基本計画策定検討委員会を設けて検討する ③関係者の意見をよく聞いて計画し事業を進めてゆく、ということだった。そこで種々の資料を渡し、朝日池が隣接する鶺ノ池と共に、渡り鳥特に天然記念物のヒシクイ・マガンの渡来地として、またワシタカ類でも天然記念物のオジロ

ワシや特殊鳥類のオオタカ・ハヤブサをはじめ各種の猛禽類が渡米するなど、野鳥にとって重要な湖沼であることを強調し、これら鳥類にとっての環境の保全を要望した。なお、後程県知事宛の要望書を出すことも話しておいた。

その後県の委託したコンサルタントのスタッフと要員が、ワークショップとして大潟町の公園予定地の調査に入った折に、一夜地元研究者などから話を聞く会があるので、朝日池の野鳥についても話して欲しいという要請が県の担当者の方からあり、資料やスライドを持参して話をした。そして計画に当たっては、朝日池・鶺ノ池に渡ってくる鳥の環境を充分保全するように、配慮して欲しいと要望した。

そのうち、県知事面接の手続きなどの準備もできて、10月23日支部長と2人で県庁に赴き金子知事不在のため、厚地副知事に要望書を手渡した。要望書には具体的に次の7項目をそれぞれ理由をつけて盛り込んだ。

- (1) 朝日池・鶺ノ池周辺には現状の他に遊歩道を含め道路は設けないこと。
- (2) 朝日池・鶺ノ池には遊覧用や釣り用のボートは、一切使用しないこと。
- (3) 当面鶺ノ池も朝日池と同様に鳥獣保護区とし、公園化までに全域に広げること。
- (4) 朝日池・鶺ノ池周辺の立木・森林・アシ原など現状のままとしておくこと。
- (5) 朝日池・鶺ノ池に汚水を流れ込まないようにすること。
- (6) 計画立案の策定委員会の委員には現地に詳しい学識経験者を選ぶこと。
- (7) 観察者用の施設等を設置する場合には、

大潟町の都市公園建設に当たっての要望

日本野鳥の会新潟県支部

平成3年10月23日

新潟県知事 金子 清 殿

日本野鳥の会 新潟県支部  
支部長 大島 基

大潟町の都市公園建設に伴う自然環境の保全について（要望）

日頃から自然環境の保全ならびに野生鳥類の保護について配慮されていることに敬意を表します。

日本野鳥の会（会員 35000人）は「自然を奪ひ守り賢明に利用することが人類の存続と幸福にとって不可欠であるとの認識に立ち、野鳥を通して自然に親しみ自然を守る運動を、社会の信頼を得て発展させることによって、自然と人間が共存する豊かな地球環境の創造に貢献する」という理念に基づいて活動しております。

ところで、先頃大潟町に湖沼を中心とした風景の都市公園建設を決定されたことが報道されました。その構想や具体的な計画立案はこれからのようでありますが、公園予定地は野鳥をはじめ豊かな自然の残る場所であり、当支部としても大きな関心を寄せているところであります。

これまで当支部会員等が調査観察した結果では、朝日池と鶺ノ池が渡り鳥特に水鳥類や猛禽類にとって、極めて重要な越冬地および中継地になっていることが明かにされております。即ち添付資料のように、天然記念物のヒシクイ・マガン・オジロワシおよび特殊鳥類のオオタカ・ハヤブサなどをはじめ、多くの野鳥が渡来し生活しております。朝日池は県設の鳥獣保護区に指定されていることもあって、水鳥類が多く時には1万羽以上に達します。また朝日池・鶺ノ池周辺のアシ原では、春と秋の渡りのシーズンに数多くの小禽類が通過し休憩して行きます。

これら渡り鳥の多くは、北方や南方の国々及び我が国との間を往き来しており、日米間、日ソ間、日豪間に締結された「渡り鳥条約」の対象種となっています。また、ここ4～5年の日ソ共同のヒシクイの標識調査により、日本海側に渡来するガン類の中継地および越冬地として、朝日池が重要な役割を果たしていることも明らかになりました（添付資料1）。朝日池・鶺ノ池は、県内はもとより全国的にも第1級の野鳥の宝庫であります。

朝日池・鶺ノ池を含めて大潟町につくられる都市公園は、このような豊かな自然を活かし、これと調和することが不可欠であると考えられるものであります。よって別記のように具体的な要望事項を掲げますので、特段のご配慮をお願い致しますとともに、後世に継承される公園を造られるよう望みます。

1. 朝日池・鶺ノ池周辺には現状の他に遊歩道を含め道路は設けないこと。  
（理由）池畔に現状以上の道路を設けて人が通るようになれば、水鳥類やワシタカ類などは警戒して飛び去ってしまい、安住の地でなくなる。また、このような鳥類は近づいて見ることはできないので、そのための観察路は必要がない。
2. 朝日池・鶺ノ池には遊覧用や釣り用のボートは、大小を問わず一切使用しないこと。  
（理由）1.と同様。
3. 当面鶺ノ池も朝日池と同様に鳥獣保護区とし、公園化されるまでは計画地の全域に拡大すること。  
（理由）狩猟期間を除けば鶺ノ池も朝日池と多く水鳥類が渡来しますので、鶺ノ池・朝日池は一括して保護区とするのが妥当と考える。また他の池も公園となつて多くの人が来るようになれば、当然狩猟の対象地としてはふさわしくない。
4. 朝日池・鶺ノ池周辺の立木・森林などは枯れ木も含め現状のままとし、伐採しないこと。また、池の縁に生育するヨシ・マコモのアシ原は、特に陸化の進行を防ぐ場合は現状のままにしておくこと。  
（理由）池周辺の立木や森林の環境はワシタカ類をはじめ多くの鳥類にとって重要なことは言うまでもない。また、ヨシと共に生育しているマコモの根はヒシクイの餌となるほか、アシ原は水鳥類の遊覧や繁殖の場所にもなり、また小禽類のねぐらや渡り時の集合地ともなる。
5. 朝日池・鶺ノ池に汚水を流れ込まないようにすること。  
（理由）生活排水など汚水が流れ込めば池は富栄養化して植物の生態系に影響を及ぼすばかりでなく、流入物質によっては食物連鎖の上から、鳥類を含め池に生息する動物全体に生存上の重大な影響を及ぼす。
6. 計画立案をする際、委員会を設けて意見を聴取するようなことがあれば、委員には各部門の専門家として現地に詳しい学識経験者を選ぶこと。  
（理由）このことは当然のことと思われるが、委員の構成で“形式的な委員会”との誤解を受けないようする。
7. 観察者用の施設などを設置するよう場合には、その場所や構造などについて、関係団体等の意見を聴取すること。  
（理由）これまでこうした施設が造られた際、往々にして“もう少し何とかならなかったか”といった声がかかる。せっかく造るのであれば、ある程度満足されるように、意見を聴取して良いものを作っていただきたい。

<以上>

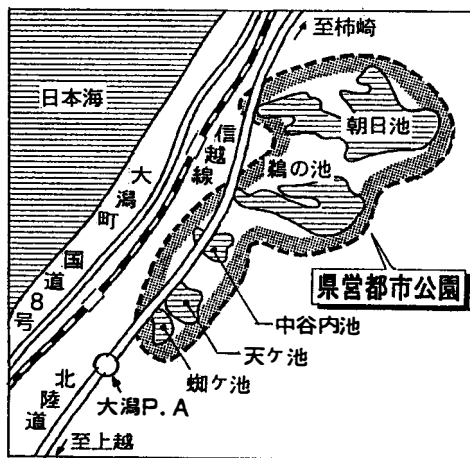
関係団体の意見を聴取すること。

以上のような経過であるが、今後の運動および課題としては

- (1) 今後出される計画に対するチェックと要望をする。
- (2) 環境保護に関して地元町民や団体の認識を深める。
- (3) 運動やイベントに多くの保護団体やその会員が多数参加すること。
- (4) 観察調査も行つて、そのデータを蓄積してゆくこと。

などであろう。（以上'92年3月に記した）

ところで、県は'92年6月にこの公園の基本計画をまとめて公表した。それによると、鶺ノ池の方は、周りに実験生態圏ゾーン・キャンプゾーン・アドベンチャーゾーン・自然観察圏ゾーンを造る計画で、相当手を加えてゆくようだ。自然観察圏ゾーンは、空中・水上・水中回廊と変化に富んだ道を造るといふ。



大潟町都市公園区域  
（新潟日報'91.9.5より）

朝日池の方は、北東に面した所に縄文体験村ゾーンを造るほか、湖面・周辺を野鳥観察ゾーンとして、展望ポイント・観察小屋・野鳥センターを設ける計画である。

運動はまだこれからも続ける必要がある。

## 〈行事報告〉

### 福島潟ガン探鳥会および支部研究発表会

'91. 12. 8

12月8日、午前中は福島潟でガンの探鳥会を、午後は毎年恒例の研究発表会を「紫雲寺さえずりの里」で開催しました。

#### 1. 福島潟ガン探鳥会

朝方どんよりした空模様も次第に青空が広がり、ピリッとした肌にしみる寒さも心地よい天候の中、午前9時、福島潟排水機場の前で約40名の参加者が集まり探鳥会が始まりました。

事務局挨拶の後、地元「福島潟野鳥の会」佐藤会長から最近の情報をお話いただきました。その後、潟の反対側にある湿地へ移動し、特にヒシクイを中心に観察を行いました。

水田や畦には、ヒシクイのものと思われる新鮮な足跡と糞便が多数散見され、刈り取られた後に出てきた稲穂が屈倒されたような形で押し倒れており、夜間の彼らの行動が窺われるようでした。

湿地には、ヒシクイの姿がわずかしか見られませんでした。上空を見上げると、北東の方向から50羽、100羽と竿となり鉤となったヒシクイの群れが次々と湧き出してくるよう飛来し、舞落ちるようにアシ原へ吸い込まれて行く姿が幾度となく観察され、参加者を喜ばせてくれました。舞落ちる鳥はヒシクイだけではなく、多少小型のマガンがその群れに混ざり、なお派手に体を揺さぶり着陸する姿が印象的でした。

また、「ミュウ、ミュウ」と鳴きながらタゲリが約50羽、優雅に飛び回り、やがて、アシ原に体を休めたガンの大きな群れの中に降り、キョトンとしたしぐさで体を動かしていましたが、次第に落ち着きを取り戻し、ともに初冬の淡い日差しを受けてのんびりと日光

浴に興じていました。よくみると、ヒシクイの中に番号は確認できないものの、オレンジ色の標識が何羽か観察されました。前日7日の調査では、10羽の標識ヒシクイが見られたそうです。遠くには、チュウヒが2羽、3羽と飛翔し、時々、カモの大群が忙しく飛び交っている光景が見られました。

ひととおり観察ができた後、「福島潟鳥類観察所」に移動し、屋上からガン類の休息風景を観察しました。

#### — 観察鳥類リスト —

ヒシクイ (3000)、マガン (200)、コガモ、コハクチョウ、オオタカ、チュウヒ、ノスリ、トビ、ハヤブサ、ツグミ、タゲリ、ダイサギ、アオサギ、カイツブリ、モズ、オオジュリン、ハクセキレイ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハンボンガラス。(21種)

#### 2. 研究発表会

午後は、紫雲寺町にある「新潟県愛鳥センター 紫雲寺さえずりの里」を会場として、研究発表会を開催しました。

はじめに、会場を提供していただいた「愛鳥センター」本間隆平所長より、センターの設立から今日までの経緯を紹介いただき、その後、研究発表会に移りました。

(1) コムクドリの非同時ふ化について (小池重人氏)

コムクドリは、卵のふ化が同じ日になる場合と、2日にわたる場合 (非同時ふ化) がみられ、その原因について巣箱を利用して調査した結果が発表されました。

(2) 日本海中部以北沿岸におけるカモメ類の分布について (渡辺 央氏)

日本海沿岸におけるカモメ類の分布を、

佐渡周囲及び北は青森県深浦港から南は福井県小浜港まで、5年間にわたり地理的及び種別に精力的に調査した結果が発表されました。

(3) 初冬の野鳥たち（スライド映写）（佐藤吟一氏）

ワシタカ類を中心に写真撮影を行っている同氏が、初冬新潟に渡来する数多くの野鳥の生態写真をスライドで紹介されました。

（小野島 学）

'91. 12. 1

朝日池探鳥会（上越地区）

今年も晴天にめぐまれてよい探鳥日和となった。自然観察指導員の会上越地区と合同で行なって、参加者は30名程。遠く村上から来られた方もあった。

折よく10時頃からヒシクイとマガンが、大群や小群で次々に帰ってきて池におりる光景を見ることができた。池におりても身近かな所でガンを見られたことに感動した参加者も多かった。ワシタカ類では、オオタカが対岸の松の木に、ハヤブサのペアが近くの鉄塔にとまっていたり、ノスリも上空を帆翔した。

〔観察鳥類〕カンムリカイツブリ、ダイサギ、マガン、オオヒシクイ、オオハクチョウ、マガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ミコアイサ、トビ、オオタカ、ノスリ、ハヤブサ、ハ



オオヒシクイの雁落ち  
（雁の群が水面におりるとき）

クセキレイ、セグロセキレイ、オオジュリン、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス。（22種）。

（山本 明）

'92. 2. 2

寺泊探鳥会

朝降っていた雪も止んで曇空ながらもまずまずの天気。9：30に町立体育館に集合、渡辺弘雄さんより寺泊の海鳥について説明をきいてから、まず寺泊港へ。ここで衰弱して漁の網にかかって保護されているシロエリオオハムが1羽いたので、手にとってよく見ることができた。足がすごく後方についていた。

次に水族館の近くでカモメ類を観察、水族館で少量の給餌をしていたので、カモメ類とトビの餌のとり方なども観察できた。カモメ類はウミネコ・セグロ・オオセグロだった。そのあと、出雲崎まで行ったが、途中の海岸でウミウ、出雲崎海岸でクロサギ、出雲崎港内ではカモメ類の他ハマシギ、シロチドリ、イソヒヨドリなども見られ、チョウゲンボウも現れた。

再び体育館に戻って昼食。吉井さんが材料と鍋持参でつくったタラ汁が振舞われた。終って探鳥のまとめをしたり、小野島さんから先のガンカモ類一斉調査の結果についてきいたりして14時に解散。

〔参加者〕25名。

〔観察鳥類〕ハジロカイツブリ、ウミウ、クロサギ、マガモ、カルガモ、スズガモ、トビ、ノスリ、チョウゲンボウ、シロチドリ、タゲリ、ハマシギ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、カモメ、ウミネコ、ハクセキレイ、タヒバリ、ヒヨドリ、モズ、イソヒヨドリ、ツグミ、シジュウカラ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、（シロエリオオハム）。27種（28種）。

（山本 明）

新潟県探鳥地散策シリーズ XI

正善寺ダムとその周辺

山本 明・古川 弘

このシリーズはまだあまり知られていない、いわば穴場的な所がこの頃は紹介されている。上越地方にもそうした所は何箇所かあるが、このシリーズにはまだ紹介されていない。

正善寺ダムは洪水防災・農業用・上水道用の多目的ダムで、9市町村の広域供給水源として84年に完成した。図のような形で湛水面積0.35km<sup>2</sup>。周囲の地形は急峻で、200～300mの尾根に囲まれ、植生は殆ど落葉広葉樹の二次林である。

ダムのできる前から、ミゾゴイ・アオバト・アオバズク・アカショウビン・サンコウチュウなどがいて、良好な生息環境であった。ダム工事とダムの完成による環境の変化で、一時現われなかった鳥もいたが、年が経つにつれてまた回復してきているようである。

最近前記5種も繁殖期に出ているし、フクロウ・ハチクマ・ノスリ・サシバなどの猛禽類も現われる。今シーズンはダム水面でヒナ連れのオシドリが見られた。時折カワセミ・カワガラスの姿も。その他、カッコウ・ホトトギス・サンショウクイ・クロツグミ・ヤブサメ・ノジコ・イカル・ニューナイスズメなども定着しているようだ。勿論低山帯の普通の鳥も生息している。また4月～5月はまだ冬鳥が残っていたり、渡りや移動途中に通過してゆく鳥も多く、それらを見るのも楽しい。これまで年間を通して91種が観察記録された。



(国土地理院 1/25000 地図より)

正善寺ダムに行くには、バスで上正善寺まで行き、そこから歩くか、車なら図のAまたはBまで行くか、県道をCまで行ってそこから歩く（B～C間は悪路で車は無理）。図の散策路とした所をゆっくり歩くのもよいし、B～C間だけでも繁殖期はかなりの鳥が出る。

調査結果の取りまとめができて、今回の支部報の発行が大幅におくれ、支部会員の皆様には大変ご迷惑をおかけしました。心からお詫びいたします。  
— 渡辺 央・山本 明

発行	1992年9月20日	No.33・34 (合併号)
発行人	大島 基	編集者 山本 明
	日本野鳥の会新潟県支部	
事務局	〒951 新潟市東中通1番町86番地28	
	☎ 025-229-2018	本間由紀子 方 <振替> 新潟 1-6002